



子どもの未来を築くために 今、学校に期待すること

新型コロナウイルスの感染拡大が、学校教育にも大きな影響を及ぼす中、未来の社会を築く子どもたちのために、学校はどうあるべきなのでしょう。2019年度の本コーナーに登場した4人が、今、改めてメッセージを送ります。

学びのコミュニティーの世界を広げよう

東京学芸大学 ICTセンター 教授 森本康彦

コミュニティーが子どもの学びを支える

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、本学では新年度の4月からすべての授業をオンラインで行っています。私が担当するゼミでも、学生と一度も直接会うことなく、オンライン会議ツールで議論しています。ゼミは進められていますが、以前よりも学生の学びが深まっていないのではないかと感じることもありました。その要因について思い当たったのは、学びのコミュニティーの存在です。同じ目標に向かって共に学ぶ人たちが創り出す場の雰囲気のような目に見えないつながりが、学生の学びを支える大きな要素であることに、改めて気づきました。

小・中学校に臨時休業時の様子をうかがうと、学びが順調に深まっていると感じられた学校では、プリントやオンラインなどの手段に関係なく、子どもの学び合う場がしっかり築かれていました。子どもが学びに受け身であると、たとえオンライン授業で教科書が進んでいても、その内容が身につかないのです。

コミュニティーの存在は、学習評価においても重要だと考えます。子どもはこの厳しい事態の中でも前に進もうとしています。先を見通して行動したり、周囲と協働したり、諦めずに取り組んだり—その子のよい点や可能性、進歩の状況などを一人ひとり丁寧に見取り、未来に向けて進む原動力となるように、積極的に評価することが大切です。そうした個人内評価の場面は、一緒に学ぶコミュニティーがあってこそ生まれるものであり、ずっと子どもの学びを支えてきた学校の強みではないでしょうか。

人と直接会うことが難しい状況では、コミュニティーは築きにくいと思われるかもしれませんが、しかし、外出がままならない中、人々はICTを利用してつながっていききました。学びのコミュニティーも同じではないでしょうか。

目的は同じでも、その実現手段は時代とともに変わるものです。恋人に会えない時に思いを伝える手段は、かつては手紙だけでした。それが、電話に代わり、ポケットベルや

電子メールとなり、今はSNSで思いを伝え合っています。同じように教育も、環境に応じて最適な方法を選択する必要があります。主体的・対話的で深い学びの実現に向けて緩やかに変わろうとしていたことが、コロナ禍によって大きな波となって押し寄せてきています。私はこれまで培ってきた学校教育の力で、その波を乗り越えられると信じています。



成長を長期的に捉え、見通しを持って育成を

2019年12月に中央教育審議会が公表した「論点取りまとめ」*では、子どもは「変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手」だと示されました。コロナ禍は、そうした資質・能力の重要性を実感する機会となりました。教育の担い手である私たちは、教育の機会が失われた「コロナ世代」と揶揄されるような子どもを生み出してはなりません。確かに、失われた時間があつたかもしれませんが、それで学びが終わるわけではありません。今できていないことがあっても、学期や年度内、あるいは6年間・3年間といった時間の中で子どもの成長を捉え、育んでいけばよいのです。もし達成できなかったことや課題があれば、次の学校段階に託し、学びをつないでいく。今こそ、幼小中高大の接続を進める時だと思うのです。

子どもを支えるのは教員であり、教員を支えるのは管理職や教育委員会です。支え合い、協働し、切磋琢磨する学びのコミュニティーを、実際の場とオンラインを併用しながら、学校、地域、自治体、国、そして世界へと広がっていくことが、地球の未来を築いていくのではないのでしょうか。

もりもと・やすひこ◎三菱電機株式会社に勤務後、27歳で教職に。中学校と高校の教壇に立ちつつ、修士・博士号を修得。2004年に大学教員となり、2017年から現職。専門は、教育工学、情報教育、教育ICT活用、教育AI活用。本誌2019年度Vol.1の本コーナーに登場。

* 2019年12月に公表された文部科学省「新しい時代の初等中等教育の在り方 論点取りまとめ」の「新しい時代を見据えた学校教育の姿」。